
Magic Fantasia

夢幻遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c F a n t a s i a

【Nコード】

N 3 0 2 6 S

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

魔法、怪物、天使、悪魔、神話…。

全ては人々の想像による創造物。それが世界に住まう人々の考え方であり、常識。

だが、私達が非常識だと思うものは…実在している。

これは、その非常識への憧れを抱いていた少年が織り成した物語…。

第零節（前書き）

どうも、夢幻遊戯です。

今回初！ 完全オリジナルストーリーを書いてみようと思い、投稿することに致しました。

ただ、妄想だけを武器に完結までただただ突っ走りたいと思います！

尚、現在「ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲」を執筆している最中ですので、此方は恐らく…否確実に亀更新となります。でもでも、頑張ります！

第零節

「――」

線路^{レール}の上を走る、長く鉄で出来た箱。

幾つもの箱で連なり、巨大な身体に大地を這いずる蛇の様に。そして設けられた線路に従い、滑らかに動く。

窓を見る。

ゆつたりと流れ行く景色。空は夕焼けに赤く染まり、連なる山々の間から時折太陽が顔を覗かせて、赤き輝きを眼に射してくる。

眩しい、青年は目を細め眉間に皺を寄せる。

眩しいのならば直視しなければいい、それが窓のカーテンを下ろして光が入らないようにすればいい。

けれども、そのどちらもする事はなく。ただジッと、赤き夕日を見つめていた。

…都会の町並みから遠く離れた、ドが付くほどの田舎を走る電車。大小新旧様々なビルが群集していた風景も、今では田畑、山、農家しかない。

車内は以前と変わらない。乗車した時と同様、がらんとした状態。今座っている車両には、自分以外の乗客者は一人もいない。

前の車両も、後ろの車両も、この車両と同じく乗客者は一人も居なかった。

前後中心、完全に貸しきり状態となっている。

次の停車駅も、そのまた次の停車駅も、乗客する人間の姿はなかった。

「……………」

出発してから、四つ目の停車駅へと着く。
車内にアナウンスが流れるも、そのアナウンスに従って降りる者はない。

数秒してドアが閉まり、電車はゆっくりと動き出す。そしてまた次の停車駅を目指して、一定の速度で走り出す。

…事の発端は、本当に偶然であつた。

青年…天村 零には両親がいない。

何故居ないのか、それは自分自身ですらも分からない。

気が付いた時には親が居ないという現実を知り、気が付いた時には孤児院で暮らしていた。

何故、親がいないのか。その理由を孤児院を経営している院長に尋ねたこともあつた。

しかし、尋ねてもいつも返ってくる答えは同じ。

分からない…、それが孤児院側の答え。

けれども、別に寂しいと思つたこともなければ。己の境遇に恨みを抱いたこともない。

生活に問題はなかった、友達も沢山いた、毎日が楽しかった。

しかし、転機と言うものは当然に訪れる。

「両親…か」

窓枠に肘を寄せ、頬杖してながら呟く。

この電車が向かう先には、俺の両親とやらが居る。

その両親とやらに、これから会いに行く。

会う理由は二つ。

一つはどんな面なのかこの眼で見ること。

そしてもう一つは、その面に一発拳を入れてやる…つまりは思いっきりぶん殴ってやる、ということ。

何故捨てたのか、どうして迎えに来なかったのか…それも問い詰めてやる予定だ。

感動の再会を果たし、家族揃って仲良く暮らす…なんて。そんな事は一度として考えたことはない。

五つ目の停車駅へと着く。

目的地まで残り後三駅。

ふと、駅のホームを見ると一人の乗客が電車に乗る姿がチラリと見えた。

ようやく、自分以外の乗客がこの電車へとやってきた。

どうやら最後尾に乗ったらしい。

どんな乗客者なのか気にはなったが、それも直ぐに考えるのを止めた。

電車は再び動き出す。

不意に、連結部のドアが開く音がした。

何となく、そっちに視線を向ける。

この車両へと移ってきたのは一人の女性だった。

褐色の肌に綺麗な黒髪をポニーテールにした髪型、御洒落と言うよりも動きやすさを重視している軽装。

歳は…恐らく自分と同じくらい。

恐らく、さっきの駅で乗った乗客者なのだろう。

だが、何故わざわざこの車両に？

この電車は合計六つの車両で編成されている。

今自分が乗っているこの車両は三号車、そしてこの車両へと移ってきた女性は最後尾…六号車に乗った。
わざわざこの車両まで移動する意味があるのだろうか…。

「前、失礼するよ」

そう言つて、女性は目の前の席に座った。

空いている席は沢山あると言つのに…、と青年は眉を寄せて疑問に思つ。

「……………」

電車は特に変わった様子を見せることなく走り続ける。

一つの変化と言えば、初めて自分以外の乗客者が現れた、と言つたとぐらうだろう。

加えて、彼女は美人だ。スタイルもいい。悪い気は全くしない。
だが、常人ならぬ気配をこの女からは感じた。

「君はどちらまで？」

不意に女性が尋ねてきた。

「…言わなきゃ、いけませんか？」

「いや、別に絶対に答える…なんて私は言わない。
だが、これも何かの縁だと思っただけさ」

「縁…ですか。…少し、とある村まで行こうと思つている、それだけです」

青年は簡潔に、目的を女性へと告げる。
すると女性もほう、と意外だなと言いたげな表情を浮かべた。

「その村…と言うのは、ひょっとして“双月ノ村”じゃないのか？」

「ッ！ 貴女も…行くんですか？」

「ああ、ちょっとした野暮用でね。そうか、君もあの村に用があつて行くのか。

これは本当に何かの縁だな」

何処か嬉しそうに、女性は言う。

…双月ノ村。決して表の人間社会には顔を出さず、人気のない森の奥でひっそりと暮らしている一族と言う。

何故そんな生活をしているのか、何故“双月ノ村”と呼ばれているのか。

それは誰にも分からない、歴史資料にさえ載っていない村…。

…自分は兎も角として。何故、この女は双月ノ村に行くのだろう。

零はそんな疑問を抱きながら、窓の景色を眺めていた。

「…一つ、君に尋ねてもいいか？」

「……………」

青年は答えない。

その態度を気に留めることなく、女性は尋ねた。

「君はどうして…双月ノ村に行くんだい？」

青年は至って普通。歳は外観からして多分…17歳ぐらい。
今時の若者らしくない風格。

次々と変わる流行に流されない、シンプルな服装。
ジャラジャラとシルバーアクセサリーを身に付けてもいない。
ピアスは勿論、髪を黒から金等に染めてもいない。

だが顔は良い、今時の言葉で言えばイケメンだ。
端正な顔立ちの男前。

これでもう少し着飾った服装をすれば、街中ですれ違う女子は皆
彼に振り返るだろう。

けど、そんな彼がどうして双月ノ村に行くのか。

双月ノ村はただの人里離れた場所にある村、と言うだけではない。
こつ言う所だ、と言う明確な情報はない。だが、今まで収集してき
た情報では、かなりの曰く付きな場所であるらしい。

人食いをしている者達の集落、という情報もあれば。

武装集団の隠れ家、という情報もある。

どれもこれも、全てバラバラ。ただ、そんなバラバラな情報だが一
つだけ一致するものがある。

いずれにせよ、双月ノ村は“常人が行くような場所ではない”とい
うこと。

どんな場所なのかは分からない。だが、とても危険な場所であると
いうことだけは、女は理解していた。

…私はソレ（危険）があると理解している。その為の準備も怠って
いない。

故に疑問に思った。目の前に座っている青年が、どうして双月ノ村
に行こうとしているのかを…。

「…別に、少し用事があるんですよ。ただ、それだけです」

二人を乗せた電車はレールを走り続ける。
窓から差し込んでいた夕日も今は山の方へと沈み、長き夜の訪れを知らせていた。

|| || || || || || || ||

二人を乗せた電車は終点に到着する。

ドアが開き、二人の乗客を降ろした電車は二人から遠ざかっていく。それはまるで、急いでこの場から離れようとするかの様に二人は感じていた。

「ふむ、場所的には…まあ悪くはないな」

女は周囲を見渡して、簡潔な感想を口にする。

視界一杯に広がる自然。木々が生い茂り、都会とは違い空気も澄んでいる。

遠くには農家が何件とあり、そこには農作物の田畑が幾つも見られた。

正にドが付くほどの田舎、都会の物は何一つとしてここには存在しない。

その分、心穏やかな気持ちではいられるが。

青年が駅員に切符を渡し、駅を後にする。

その後に続いて私も切符を渡し、その青年の後を追いかけた。

駅を出て北に進むこと十分。

もう農家も田畑も何もない。あるのは木という自然だけ。

鬱蒼とした森の中を、二人して歩いていく。

日はとうに沈み、夕日で赤く染まっていた空は満天の星で色鮮やかに輝いていた。

そして、その星よりも遙かに美しく輝く大きな宝石…満月が唯一、行く道を示してくれる明かりだった。

金色に輝く美しい満月。

…こんな美しい満月が浮いている夜は不思議なことが起きる、と。

今は亡き祖母より聞かされたのを、今でも鮮明に憶えている。

今までその不思議なことが起きた事はなかった。

でも何故か、今日は本当に起きそうな…そんな気がした。

「……………」

女はふと、目の前を歩いている青年に視線を向ける。

何も喋らず、黙々と森の奥へ…奥へと進んでいく青年。

その後に続いて、同じく何も喋らず森の中を進んでいく。

青年の足取りは軽い。対し、女は慣れぬ獣道に苦戦していた。

人の手が全くとって施されていない自然道。

コンクリートで歩きやすく作られてないのは勿論、木の枝や蔦が剥き出しになり注意して歩かなければ転んでしまう。

…もう既に、ズボンが尖っていた木の枝に引っ掛かり破けてしまった。

ほんの少しではあるものの、ショックである。

青年はこの獣道を難なく歩いている。

この場所に来たことがあるからか、それともこう言った道に慣れているのか…。

「…君はどうして、そんなにも早く歩けるんだ？」

「別に。ガキの頃からこんな道歩いてましたし、慣れているだけです」

青年は歩みを止めず、背中を向けたまま質問に答えた。
どうやら、後者であつたらしい。

現代っ子にしては珍しい、この青年は自然と共に遊ぶ子供時代を送つてきたようだ。

女は獣道に苦戦しながらも、青年の後ろをただ必死に追いかけた。

と、不意に青年が立ち止まる。

それに合わせて、女も歩みを止めた。

気が付けば苦戦していた獣道は終わり、ようやく人の手が施されたと思わしき場所へと出る。

円形状に設けられた広い空間。

遊具や建物は特にない。ただ広いだけの空間がそこにあつた。

「どうしたんだ？」

「……来る」

その言葉が合図となつたのか。

風が吹いてないにも関わらず草木が激しく揺れ始める。

そして――、

「…えっ？」

女は、我が眼を疑つた。

子供の頃から、ファンタジー幻想と言う物が凄く好きだつた。

絵本に出てくる妖精や悪い魔女、そして…摩訶不思議で素敵な魔法。

あれは全て実際にあるのだと、幼い頃より信じていた。

その辺で拾った木の枝を魔法の杖と見立てて、魔法の練習をしていたのは…今でも懐かしく、そして少し恥ずかしい記憶だ。

そして大人になるにつれて、幻想は所詮幻想でしかないという現実を知った。

魔法なんてものはない、怖い怪物もない。

全ては人間の想像、或いは妄想によって生み出された産物に過ぎないのだと。

だからこそ、私は今自分の眼が正常であるか否かを疑っている。

夢でも見ているのか、とも思った。

だって、そう思うのも無理はない。

今、目の前にいるのは…この世に存在する動物とは思えないモノが、そこにいるのだから。

多分…形としては猿に近い。大きさ的にも身体の構造的にも。

が、実際の猿なら眼が黄色に輝いていない。

ましてや、背中にセイウチの牙の様な鋭い突起物も生えていない。

鳴き声も、本来の猿の鳴き声とは程遠く。ぼぼぼ、と人を不快にさせる鳴き声だ。

「な、何だ…コイツら!？」

女は驚愕の声を挙げる。

それでも、自分が今何をすべきかだけは理解していた。

身体が自動的に動き、腰のホルスターより銃を抜き取る。

ベレッタP x 4…つい最近出来た、新しい相棒である。

抜き取った銃口を、猿のような怪物に向ける。

すると、青年が静かに左腕を伸ばした。

やめろ、と私を制するように。

「貴女は下がっていて下さい。ここは、僕がしますから」

「なっ…！！ 君に一体何が出来るっていうんだ！？」

青年の言葉に、女は驚いた。

目の前にいる青年は、ごく普通の青年。

自分の様に何か特別な武装をしている訳でもない、一般人だ。

そんな彼が、あの怪物に対して何かが出来るとは到底思えない。

一方で、私なら何とか出来る。

怪物を退治する、なんて子供の頃に読んだ絵本の様なシチュエーションをするなんて、夢にも思っていなかったけど…。

それでも、私にはこの世界で最も最強の武器に部類される銃がある。幾ら怪物でも、鉛弾で脳天を打ち抜かれれば一溜まりもない…筈だ。

「通常の武器じゃ、あれは斃せませんよ。

あれは人間じゃないのは勿論、この地球上に生息するどの生物にも当て嵌まらない」

青年は、まるで此方の心を読んだかの様に。

私がしようとしていることが無駄であると、そう静かに言った。

では、どうするのか。そう疑問を抱いたと同時に、異形の者達は一斉に襲い掛かってくる。

「ッ！」

女は咄嗟に手にした銃を構えた。

長年に渡る経験、そしてこう言った場合^{ケース}に働く生存本能が身体を動

かす。

銃口を異形の者の一匹へ。そして後トリガーを引けば9mmパラベラム弾が発射される。

それよりも早く、何かが中空を走った。

金色に等間隔で光り輝く何か。

じゃらじゃら、と金属を擦り合わせる様な音と共にソレは中空を素早く奔り、異形の者達に襲い掛かる。

するとどうか、金色の輝きを放つ何かが異形の者達の身体を音もなく切断するではないか。

血も吹き出ることなく、鋭利な刃物で切り裂かれた様な断面図を作る。

次々と解体されその場に転がる異形の者達の軀。

金属が擦れ合う音が止まる。

そして、あれだけ居た異形の者達の姿はもう見当たらない。

あるのは…形があつた状態から数個のパーツに解体された肉解だけだつた。

「……………」

言葉を失つた。

ただ、啞然と見ているしかなかった。

青年の袖口より伸びた、地面に垂れ下がっている長い一本の鎖。

鎖の一つ一つには、金色の輝く変わった形の模様…文字が浮かび上がっている。

あれは確か…ボンジと呼ばれるものだつた筈。

「ふう…怪我はないですか？」

青年がゆっくりと此方に振り返る。

電車で見た黒く綺麗な瞳は…、

「…蒼い、瞳」

月の様に神々しく、そして言いようのない恐怖を与える。
そんな色をした両眼が、女の姿を捉えた。

第零節（後書き）

とりあえず、今回はプロローグ的な感じですよ。
次話より本編開始…みたいな？

すわっ！！

第一節（前書き）

第一節です。

なんとか書けたので、投稿します。

…後で修正とかするかもです！

第一節

七月初旬、長かった梅雨がようやく終わり本格的な暑さ…夏へと、季節は移り変わろうとしている。

うるさい蝉の鳴き声、雲一つない快晴の空よりギラギラと輝く太陽。その太陽より放たれる眩い日差しは、容赦なく地を…世界を熱し気温を上昇させる。

少し歩いただけで汗が流れ落ちる、今日も今日で暑い。

七月初旬でこの暑さ。なら、八月へと入った時…一体どうなってしまうのだろう。

そんな事を考えながら、いつもの歩き慣れた通学路を通って学校へと向かう。

…暑い。滅茶苦茶暑い…。

汗でへばり付いたワイシャツの感触が実に不快感を生む。

早く学校に言っ、冷房の効いた教室に入って熱された身体を冷やしたい。

そんな気持ちで、暑さと戦いながら通学路を歩く。

「おっす、零」

一人の女子生徒が話しかけてきた。

栗毛のツインテールに翡翠色の瞳、すれ違いは男女問わず振り返る程の顔立ち。

一言で言えば、美少女。

「おはようリセ…じゃなくて、えっと…美由紀」

「また私の名前間違えたな零い……でもいいぜ、お前だから特別に

許してやる。

私は心がとても広いからな」

男口調で話す少女…名前は片岡 美由紀。

僕と同じ学校に通う同級生で、同じクラスの一員。

そして、僕のよき理解者であり…一番の友達、心友と呼べるものだ。こうやって美由紀と通うこと一年、周りからはラブラブ“変人”カップルなんて言われているけど…残念ながら、美由紀とはそんな関係じゃない。

そもそも、美由紀と僕とでは恋人関係になることは絶対じゃない。

「で、昨日もお前はやってたのか？」

「うん、色々と試してるけど…全然ダメだね」

美由紀の問いに、零はやれやれ、と肩を竦める。

…僕は魔法という存在に^{もの}凄く関心がある。

魔法、それは非現実的な物であり…そして人々によく知られている物。

ゲームやファンタジー小説では最早お馴染みの存在。

ファイア、と唱えれば火が生まれて敵を焼き尽くしたりする…アレだ。

子供の頃から、僕は幻想という^{ファンタジー}モノが大好きだ。

ドラゴンや魔王は居て、それをやつつける勇者も居る。幼少期より、その勇者に僕はなると言って無茶をやっていたのは、今でも鮮明に覚えている。

今だからこそ思っけど、本当に無茶なことばかりやってきた。

怪物を退治すると木で作った剣を手に山の中に入り、結果搜索願を

出された…なんてこともあった。

兎に角、それぐらい好きだし…その分大人たちに迷惑を掛けてきた。それでも、僕は幻想ファンタジーが好きだ。勿論今も、現在進行形で。

美由紀の言う様に、昨晚も色々と魔法の勉強をしてそして実践してみた。

曰く、僕にも魔法を使える才能…魔術師としての素質があるらしい。美由紀が言うのだから間違いない。そして才能があるのなら、使わないのは勿体無い。

本屋に通って魔法や魔術に関する本を買い漁った。

学生の本業である勉学をそっちのけて読み吹け、時には練習もしている。

…今の所、それが実った例は一度としてないのだけれど。

そもそも、ないと思う方が可笑しい。

魔術や魔法、それらは確かに存在していた。でも、時代が進むに連れて科学という力が発展し、時が経つにつれて記憶より忘れ去られただけに過ぎない。

魔法や怪物は…幻想ファンタジーは実在する、と僕は今でもそう思っている。

これを友人達に話したら、いい加減目を覚ませ…なんて酷い事を言う。

でも、そんな中唯一理解してくれたのが彼女だ。

それ何より、彼女の存在自体が…幻想ファンタジーは実在するという証拠でもある。

「なありセ……じゃなくて、美由紀」

「お前さあ、何回間違っただよ…」

「い、いめん…」

「ハア……。いいか？ 私とお前、二人だけにいる時はそう呼んでいい。
が、周りを見てみる。他にも通学してるヤツがいるだろうに…まったく」

呆れた様子で、美由紀が言う。

片岡 美由紀…という少女、もとい人間はこの世に“存在しない”。
何故なら、彼女は人間ではない。

では何か？ 彼女は…“悪魔”なのだ。

片岡 美由紀こと彼女の本名はリセフィーラ、“魔界”に住まう悪魔の一人である。

彼女曰く、片岡 美由紀という姿は人間界で行動しやすくする為の仮初の存在。

悪魔は、人間の姿に変えられるらしく、リセの人間状態がこの姿。

本来の姿はおどろおどろしい、とは…本人談。

そんな彼女との出会いは、実に奇妙なものだった。

一年前の、丁度今日の様に暑い真夏のある日。

いつもの様に学校帰りに古本屋に行って、魔法に関する本がないか探していた。

その時、僕はリセと出会った。

『随分と熱心に魔法について探してるな、お前。

やめておけ、そんな本に書いてる物は殆どがデタラメだ』

そう言って、男口調で話しかけてきた少女。

全く知らない相手に自分の趣味を否定され、少しだけ怒りを芽生えさせた。

しかし、この時…普通の少女にはない何かを感じ取った。

どうして、そんな事が分かるんだ？ と直ぐに聞き返した。
すると問いに対してクスクスと笑いながら、彼女は答える。

『だってさ、ソレ。何も魔法について知らないヤツが、妄想と想像
だけで書いたのが丸分かりだっつーの。』

そんなの読んだって、魔法は一生使えなやしない。時間と労力の無
駄ってヤツ。

なんなら、私が本当の魔法ってヤツ…見せてやろうか？』

何とも魅力的な誘いだっただ、と今でも思っている。

僕は何の疑いも抱かず、その申し出を受け入れた。

それがリセが僕を気に入った理由らしく、結果として僕は魔法を知
った。

リセ曰く、何てバカで…そして純粋で真っ直ぐなヤツなんだ、との
こと。

…確かに、彼女の言う通り僕はバカなのかもしれない。

魅力的な誘いだとしても、常識のある人間なら見知らぬ相手につい
て行こうとはしない。

でも、リセは信頼出来るとあの時思った。

明確な理由は…ない。でも、何となく…リセを信じていいと思った。

それから、僕とリセの…人間と悪魔の交流が始まった。

「本当に、ごめん。でも、ついリセって言っちゃうんだ…。
この方が僕にとっては呼びやすいし…」

「ハア…もういいよ。っと、学校に着いちまったな…」

嫌そうな表情を浮かべるリセ。

彼女の視線の先には、通い慣れた学校の外観が見えてくる。

ざわざわ、と談笑で溢れ返る教室。

蒸し暑くもなく、冷房によって冷やされたこの空間は今だけのオアシス。

学校が終われば、再びこの地獄の猛火の中を歩かなければならない。それが嫌で、皆なかなか教室から…学校から出ようとしなない。

「さて…と」

零はカバンに教科書を詰め込むと、そのまま席を立って教室を出る。

…もうすぐ学校生活を送る者にとって最も長く、そして一番宿題を出される過酷な休み。
夏休みが待っている。

従って、七月初旬に入った時点で授業は短縮。加えて午前中までしかない。

この冷房の効いた部屋で過ごせるのも、ほんの僅か。

その僅かだけの幸せを味わって、家に帰る為に長き地獄を再び味わう…。

…けど、いつもなら憂鬱間に浸るところだけど、今回はちょっとだけ違う。

確かに、この暑さの中を歩くのはとっても億劫だ。

でも、今日は計画していた“アレ”を遂に実行する日。

本当なら、学校なんか放って直ぐにでも実行したい。

が、本業はあくまで学生。趣味だけに囚われ、疎かにしてはいけない。

流石の僕も、そこはちゃんと踏まえているつもりだ。

「よお零。お前、この後どうするんだ？」

少し疲れた表情を浮かべて、リセが話し掛けてくる。

「うん、今日はちょっと用事があるんだ」

「…なんだよ、その用事って」

「うん？ それは秘密」

そう言うと、何故かリセは不機嫌そうな顔を浮かべる。

誰にだって人には秘密はある。勿論、リセにも。

リセが何故人間界に、片岡 美由紀という偽名を使って学校に通っているのか。その理由は未だに知らないし、リセ自身教えてくれない。

別に気にしてないし、無理矢理聞き出そうと言う気もない。でも…リセはと言うと、

「おい、私にも教えろ」

「えっ？ な、何で？ 別に面白くも何ともないし…」

「いいから教えろ、お前に拒否権はない」

顔を寄せて、問い詰めてくるリセ。

何故こんなにも問い詰めてくるのか、零は眉を寄せた。

その時、三人の少女が話し掛けてきた。正確にはリセに、だ。

「ねえ美由紀、今日学校終わったらカラオケ行かない？」

「えっ!？」

「そうした方がいいよ、美由紀。
最近カラオケ行ってないなって、僕にばやいてたぐらいたし」

「そうなんだ！　じゃあ決定ね！

勝手に話を進められて、リセは焦っている。

「ゴメンね零くん、愛しの美由紀ちゃん持って行っちゃって」

「なっ!？　バ、バカ…俺とコイツはそんな関係じゃないっつーの
ッ!!!」

「またまた〜照れちゃって〜」

「いいよ、僕も今日は用事があつたから」

「零ーッ!!!」

こうして、僕は教室を後にする。

その後ろでは誤解を招く発言をするな、と叫ぶリセの声と。
そんなリセに可愛い、照れ屋、とからかう女子生徒の声を聞きながら。

|| || || || || || || ||

古くからの言い伝え。

町外れにある館には、悪い魔女が住んでいる。

決して…近寄ってはならない。

魔女に魅入られし者は…魂をも喰らい尽くされてしまう…。

自宅から自転車を走らせること、約一時間。

長い長い森を抜け、その先にある大きな一軒の館。

外観はとても立派、貴族が住んでいるかの様な雰囲気を出している。いつ頃建築されたのか、それは分からない。けれども、まるで新築同様とも言えるぐらい手入れが施されている。

「いよいよ、魔女とご対面か…」

零は、生唾を飲み込む。

子供の頃より、大人達が言い聞かせ続けてきた…ある約束^{ルール}。

町外れにある大きな館には、悪い魔女が住んでいる。

行ったら食べられてしまうから、絶対に行ってはいけない。

そう大人達は、子供の心に塗り重ねる様に言い続けた。

今思えば、アレは浮浪者や危ないヤツがいるから近付くな…そう言う意味を込めて大人達は言ったんだろう。

幼い子供に浮浪者、なんて言葉で言うよりも…身近にある架空の悪と置換する方が効果はあると思う。

子供は純粹無垢、大人達の言うことを素直に聞く。

そして子供達に聞かせる童話も、効果を増幅させる道具。ヘンゼル

とグレーテルや白雪姫に登場する魔女は、悪の存在として認識されている。

だからこそ、子供達は魔女は悪者だと思い込んでいるから…大人達の言う事を素直に聞く。

僕も、その内の一人だった。でも今日、大人達の約束を破る。

魔女は実在する。

何故か、それを教えてくれたのはリセの存在。

悪魔や魔界があるのならば、魔女だっている。

大人達が言い聞かせてきたアレは、全て真実なんだ。

その魔女と、今日対面するつもりで来た。

見てみたい、魔女と言う存在が…一体どんなものなのかを。

それを今日、遂に実行する。

「……………」

心を落ち着かせ、深呼吸をする。

魔女と話す準備は…万全。同時に逃げる為の体調も…良好。身体に問題なし、いつでも全力を出せる。

「よしっ!!」

気合を入れて、門を潜る。

意外な事に施錠はされていない。門は、訪問を拒む事無く開かれる。

一先ず、敷地内へ。

そして、魔女の住む館の入り口…扉の前へと立つ。

…若干緊張している。

が、ここまで来た以上は…引き返せない。

覚悟を決めて、扉を三回ノックした。

「……………」

ノックをしてから、相手の対応を待つ。
暫くして。扉がゆっくりと開かれた。

「……………」

「……………」

零は、相手をただただ見つめる。

扉が開かれた先、出迎えたのは…一人の可愛らしい少女だった。
身長も低く、幼さを感じる。例えるなら、中学校一年生ぐらい。
でも、外観は普通の…“人間”の少女じゃない。

皮膚は肌色じゃなく薄い青色。そして瞳は血の様に赤く、耳がある
べき場所に鰓の様な物が生えている。そして…腰まで届く蒼い髪、
米神の辺りより天へと向かって伸びた双角。

目の前にいる少女を例えるのなら…そう、まるで竜人。

「えっと……君が魔女、さん？」

とりあえず、少女に零は尋ねた。

と、少女は首を横に振って質問に答える。

どうやらこの子が魔女ではないらしい。

じゃあ、今僕の目の前にいるこの少女は一体何者か？

リセの様な悪魔だとは思っただけけど…

…リセもそうだけど、この子もとてもじゃないが悪魔に見えない。
イメージとして、悪魔はカッコ良くて…そして力強いというイメー
ジが僕の中にある。

だけど、この少女にはそれが全くない。イメージと逆の姿。可愛いくて、とてもか弱い…。

…まあ、悪魔にはこういったタイプの悪魔もいるんだろう。

「どうしたのですかレヴィ。おやつ、珍しいですね…この様な所に人が訪れるなんて」

…言葉を失った。

少女の後ろより姿を見せた、一人の女性。

腰まで届く綺麗な金色の長髪を靡かせ、赤をメインとした古風なドレスを纏う。

美しい容貌も合わさって、貴族の令嬢と言った印象があった。

そして、同時に。僕は確信した。

この人が、この綺麗で優しい笑みを向けているこの人が…魔女なんだ、と。

第一節（後書き）

第一節でした。

前にも申し上げました通り、夢幻協奏曲を作成中の為更新が非常に遅くなりますが…出来ればこれも一週間に一話のペースで投稿出来るよう、頑張ってみます。

駄作ではあると思いますが、応援して頂けたら嬉しいです。
それでは。

すわっ！！

第二節（前書き）

第二節です。

… オリジナルやっぱり難しいです、はい。

第二節

扉を潜れば、外觀相応…まるで宮殿を思わせる内装となっている。

「す、凄い立派な家ですね…」

素直に感想を述べる。

正に貴族が住む家。天井には立派なシャンデリア、壁には見たこと
はないけれど…観る者の心に印象深く残す何かを与える絵画が幾つ
も飾られていた。

…僕のような人間が来る場所じゃない、とんだ場違いにも程がある。
せめてスーツでも着てればよかったんだろうけど…この真夏の中を
スーツで出歩きたいし。

「ふふふ、有難う。そう言ってくれたのは、貴方が初めてですよ」

僕の感想に、女性は優しく笑みを浮かべた。

館自体の作りは、三階建て。

一階は主に生活エリア。キッチン、リビング、そしてバー。

二階よりこの館の主である彼女やあの少女の寝室。

そして三階は客室に書斎、遊技場があるらしい。

僕は今階段を上がり二階へと向かっている。

これから向かう場所は、彼女の…アリッサさんの部屋。

是非部屋でゆつくりと話がしたい、と彼女からの提案だった。

見知らぬ来客者をいきなり自室に案内するとは、少し予想外だった。
…ただの来客者を招く為のものか、それとも実験材料等にする為の
罠か…。

…僕はこの女性が、魔女が童話に出てくるような悪い魔女とは思えない。

でも、念には念を。

悪かろうとなかろうと、この人が魔女である事を忘れてはいけない…。

「さあ、ここが私の部屋です」

部屋の前に辿り着く。

鬼が出るか、それとも蛇が出るか。

不安と期待、二つの感情が混じり合い生まれた緊張によって鼓動が早まってくる。

煩いくらい、自分の鼓動の音がハッキリと耳に響く。

そして遂に、魔女の部屋が開かれた。

「美味しいですね、この紅茶」

「そうですか？ お代わりはまだありますよ」

小さなテーブルに二つの椅子。

向かい合うように彼女と座り、差し出された紅茶を啜っていた。

紅茶はあまり飲まない方だ。だけど、この紅茶はとても美味しい。

今まで飲んできた物なんかよりも、ずっと。

それに、手製だという差し出されたケーキも絶品。紅茶とよく合うし、食べていても胸焼けを起こさない程よい甘さ。

このケーキなら幾らでも食べれそうだった。

…彼女の名前はアリッサ。

そして、その正体はやはり…魔女。

結構前から日本に住み、ここを家として静かに暮らしていたそう。趣味はティータイムと読書、らしい。

「ところで、零君はどんな用件で此方に？」

「昔から、ここには魔女が住んでるから近付いちゃダメだって、子供の頃から言われてました。

でも俺、魔女って本当にいるのか…凄く気になってたんです。だから今日、魔女である貴女に逢いに来たんです」

「…それだけの、理由ですか？」

「はい、それだけの…理由です。

えっと…やっぱりご迷惑、でしたか？

いや、ご迷惑ですよ。ごめんなさい…」

僕の答えが意外な物だったのか。

アリッサさんは少し啞然とした様な表情を浮かべている気がする。少しして、アリッサさんはクスリと笑った。

「そうですか。どうやら嘘を言っている様にも見えませんし、本当のようですね。

それに、私は全く迷惑だなんて思っていないですよ。

こうして人とお話するのは…本当に久方振りですからね」

「そう言ってもらったら、助かります…」

「面白い人ですね、零君は。
あつ、ケーキもう一つ如何ですか？」

「あ、食べます食べます」

三つ目のケーキを食べる。

…アリッサさんは悪い魔女なんかじゃない。
とても優しく、綺麗で。まるで、母親みたいな感じがした。
その時、何処からか視線を感じる。

「???」

ケーキを突いていたフォークを止め、零は視線を感じる場所に振り返る。

この部屋の出入口。

アリッサさんが確かに閉めた筈のドアが僅かに開いており、その隙間から赤い眼が此方を覗いていた。

多分、さっきの少女だろう。

するとアリッサさんも視線に気付いたのか、優しい笑みを浮かべて視線の主の手招きをする。

「……………」

ゆっくりと、ドアを開き入室してくる少女。

そして歩み寄ってきたかと思うと、赤い瞳をジッと此方に向ける。
何か言いたげな視線。この視線が何を意味しているのか、暫し考える…。

「…あつ！　そういうことか。ゴメン、ここは本来は君の席なのか

な？」

多分、今座っているこの席は恐らく。普段少女が座っている席なんだろう、と零は考えた。

つまりは、少女の視線の意味はそこを退いてくれ、と言う意味。

なるほど、普段自分が座り慣れている席に見知らぬ男が座っていたら疑問に思うし、それに嫌な気分になるのは当たり前。

が、席を退こうとした時、少女は首を横に振り違うと答える。

じゃあ、この視線の意味は何か？ そう思ったと同時に、少女は座っている膝の上へとちょこん、と座った。

突然の、少女の思い切った行動に零は驚く。

少女の行動を見てアリッサは、まあ…、と少し驚いた声を出しそして優しい笑みを浮かべた。

「どうやら貴方は、レヴィに気に入られたみたいですね」

「えっ？ でも僕…何もしてないですよ？」

「語らずとも、心を許せる相手か否かは…この子には分かります。貴方の優しい魂の波動…その波動に安らぎ、心地安さを感じたからこそ…この子は貴方に心を許したんです」

「な、なんかそう言われると…照れますね、ハハ」

気恥ずかしさに頬を掻きながら、膝の上に座っている少女を見る。視線に気付いたのか、少女は顔を振り返せると…静かに口元を緩めた。

そんな少女の可愛さに思わず、頭を撫でてしまう。突然撫でたことに少女は小さく身体を震わせた…が、直ぐに気持ち

よさ様に眼を細める。

まるで妹と接している気分になる。

…僕には両親や兄弟がいない、所謂孤児ってヤツだ。

気が付いた時には、同じ孤児院暮らしをしている皆の中に居て…そして自分は捨てられたのだと理解した。

その中での生活は、決して悪いものじゃなかった。

どういった経緯であろうと、同じ境遇者と言うこともあつて皆の連帯感はとても強く。

血は繋がっていなくとも、本当の兄弟のようだった。

その中で弟分や妹分がいたけど…。

是非僕を引き取りたいと言う夫婦、今の性である天村家に引き取られてからは…僕は独りとなった。

「えっと…僕の自己紹介がまだだったね。僕は天村 零。

君は…レヴィ、だっけ？」

「…レヴィアタン」

「レヴィアタン…ああ、それでレヴィか。

じゃあ、これからよろしくレヴィ」

「……………っ」

握手をする為の右手を差し出す。

レヴィアタン…レヴィーはそつと手を出し、そして優しく握った。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

楽しい時間は早く過ぎ去り、苦難の時間はとてつもなく長く感じる。正にその通りだ。アリッサさん、レヴィーとの三人での楽しいお茶会はあつと言う間に時間を経過させる。

時刻は午後五時前、そろそろ帰らないといけない時間。

一応、家は門限午後六時と決まっている。これは幼少期よりの仕来り。

ここから家まで自転車を漕いで約一時間。家に着くのはギリギリ、と言ったところだろう。

「それじゃあ、俺はそろそろ帰ります」

「もう帰るのですか？　せめて夕食でも一緒に如何ですか？　いつその事、今日は泊まっていつでも構いませんよ？」

「……………」

レヴィーがこくこく、と首を縦に振っている。

…とても魅力的なアリッサさんの提案。

アリッサさんのお手製ケーキはとても美味しかった。なら、食事もまた絶品なんだろう。

是非とも食べてみたい、と言う気持ちはある。でも…、

「いえ、明日も学校ですから。今日はこの辺でお暇させてもらいます」

零は丁重に、アリッサの申し出を断った。

…家に帰った所で、誰かが出迎えてくれる訳でもない。

親も、兄弟も、誰も自分の帰りを待っていてくれる者はいない。

僕は俗に言う、天涯孤独というヤツだ。

僕を引き取ってくれた、天村家の人…義理の両親も、高校に進学して直ぐに交通事故で亡くなった。

残してくれたのは、僕への遺産と住んでいる家のみ。

それでも、僕を育ててくれた両親の教えを背きたくない。

それに、自分はまだ学生だ。短縮と言っても、まだ学校もある。だから、アリッサさんの申し出を受け入れる訳には…いかない。

「…………グスッ」

誘いを断ったことで、レヴィーが目頭に涙を浮かべる。

別れを惜しみ、泣かれる程まで懐かれるのはとても嬉しい。

けど、それとこれとは別。

「ああ、泣かないでくれてレヴィー…」

泊まるのは無理だけども、また来ることは出来るから。な？」

「グスッ……ホント？」

「ああ、えっと…アリッサさんが許してくれたらになる、けど……」

ちらり、と零はアリッサの顔色を伺う。

「私是一向に構いませんよ。またいつでも遊びに来てください。心より貴方が訪れる事を、お待ちしております」

アリッサさんから直々に許可を貰った。

これで何の問題もなく、この館へと来る事が出来る。

心の中でガッツポーズをし、自転車へと跨る。

「それじゃあ、俺はこれで。また、明日も来ていいですか？」

「ええ、是非いらして下さい。」

…道中気をつけてね、零君」

「はい！ それじゃあレヴィーも、また明日」

「…うん、待ってる」

二人に別れを告げ、零は跨った自転車を走らせる。

風を切り、自然道を駆け抜ける自転車。

風がとても気持ちいい。それに日が沈みかけている事もあって、昼間の様な暑さじゃない。

「…また明日、か。よっし！ 今日も帰ったら特訓するか！」

|| || || || || || || || || ||

深夜零時。

日はとうに沈み、空は満天の星が煌く美しい夜空へ。

その光景はまるで、宝石が散りばめられた宝箱の様。

そしてどの宝石よりも一際大きく、そして神々しい輝きを放つ宝石が一つ。

白色の神秘的な輝きを地上へと照らす、半月。

その月明かりを窓より受け、部屋をつつすらと照らし出す。

「……………」

床には白い用紙に自分の血で書いた魔法陣。

そこに小さな枝を数本、中心に。

そしてライターで火を点け、小さく燃える焰をジッと見据える…。

一呼吸、精神を統一させる。

そして……、

「…燃え上がれ！」

右手を翳し、魔方陣中心で小さく燃える火に向けて命令を下した。

…だが、それだけの話である。

燃え上がれ、と命じた小さき炎は…特に何の変化も起こさず。

揺れ動くこともなく、ただ燃えていた…。

「…失敗、か」

心底残念そうに声を漏らし、零は燃えている火をそつと吹き消す。

火が消え、物質が燃えた焦げ臭い匂いが部屋に充満する。

窓を開けて換気、そして部屋の明かりを点ける。

…どうやら今日も失敗の様だ。今日こそは何となく、上手く行く…
と思っただけだ。

それは僕の勘違い、という形で終わった。

今ので、確か13回目の挑戦。流石に疲れたし、今日は幾らしても
進展がなさそうだ。

後片付けをして、ベッドへと倒れこむ様に横になった。

「ハア……」

溜息が何度も出てくる。

才能があっても、魔法が使えなければ意味がない。

…どうすれば、僕は魔法が使える様になるんだろう。

リセは頼んでも教えてくれない。リセ曰く、面倒くさいから。そんなもの、自分で何とかしろとハッキリと断られた…。

「ハア…今日はもう休もう。

明日も学校あるし……」

もう一度大きな溜息を零し、部屋の明かりを消す。

明日は嫌いな社会学の授業がある、しかも二時間連続で。

短縮授業になったとしても、嫌いな教科を二回も続けて受けなければならぬのは途轍もなく憂鬱。

…明日学校休んで、アリッサさんの家に遊びに行こうか。

そんな不謹慎な考えを抱き、すぐに振り払って消灯。

如何なる理由があっても、絶対にズル休みだけはしない。

それでも、憂鬱であることには変わりなかった…。

「うん、美味しい」

口に広がる程よい甘味。

今日突然の来訪者、天村 零と名乗る少年が持ってきた和菓子…水羊羹。

手ぶらでいきなり訪問するのは失礼で、これはその近付きの印だそうだ。

彼が持ってきたこの水羊羹も、なかなか美味しい。

この暑い夏の季節にピッタリのお菓子を堪能しながら、アリッサは窓に視線を向ける。

開けた窓から吹く、緩やかな風。その窓の向こうには、白く神々しい輝きを放つ半月が浮かんでいる。

その輝きは本当に美しく、そして…氷の様な冷たさを感じさせる。

「天村 零…か。素敵な子だったわね…」

脳裏に思い浮かべる、突然の来訪者。

邪な考えや企みは一切なく、ただ魔女である私に逢いに来たという理由だけでやってきた少年。

彼の心は、魂はとても清い物だった。

それに魔女である私を、使い魔であるレヴィを軽蔑する様な眼で…彼は私達を見なかった。

魔に対しても、彼は一個人として優しく接してくれた。

嘘や、演技で出来る態度じゃない。間違いなく、あれは彼の優しさ。

そろそろ帰る、と零君が言った時…私は引き止めたい気持ちで一杯だった。

レヴィも彼の事を痛く気に入り、別れを嫌がっていた。

でも、また明日来てくれるのなら…それはそれでいい。

明日が実に楽しみである。

「早く、明日が来ないかしらね…待ち遠しいわ」

水羊羹を食べ、再び満天の星の空を見上げる。

今、彼も自分と同じようにこの綺麗な夜空を見ているのだろうか。

そんな事を思いながら、アリッサは緑茶を静かに啜った…。

第二節（後書き）

第二節でした。

： 本当にオリジナル、考えるの大変ですね。

妄想だけではちよい火力不足ってのが実感出来た気がします。

こんな調子ですが、生暖かく見守って兼応援して頂けたら嬉しいで
す。

すわっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3026s/>

Magic Fantasia

2011年10月8日11時02分発行